

【本稿について】

本資料は、2003年に雑誌『Catia』へ寄稿した際の執筆元原稿をPDF化したものです。出版社での編集・調整を経る前の原稿であるため、実際の掲載内容とは一部表記が異なる場合があります。また、内容は執筆当時の情報に基づいています。

卑劣な動物虐待をやめさせるには？

猫や犬といった小動物を虐待するニュースがあとを絶ちません。

‘02年に発覚した「こげんた」ちゃんのインターネット上での殺害は、多くの動物愛護者の憤りを買って、犯人逮捕&有罪確定にまでこぎつけました。しかし、多くの殺人者や殺人予備軍が人を殺める前に動物を殺しているという事実は無視できない現実です。また、「無知による虐待」も、実は他人事ではありません。

言葉で訴えられない動物たちのために、私たちに何ができるかを考え、行動を起こすことが今、切実に求められています。

**最も悪質な動物虐待
快楽のための殺害**

動物虐待と言っても、種類は様々ではありません。たとえば、本人の無知から起きる“意識しない虐待”や、残虐行為をはじめから意図した“意識的な虐待”などがあることを皆さん、ご存知だと思います。そうした虐待のなかでも特に許しがたいのが、自分の快楽のために動物の体を切り刻み、死に至らせる行為です。

ここ1～2年にニュースになったものだけを挙げてもきりがありません。小学校のうさぎ17匹を殺害したり、子猫の胴体と頭部を切断して放置したり、野良犬に散弾64発を打ち込んだり、犬の足に金具リングを貫通させたり、猫の額に矢を放ったり、猫の舌を切ったり、鳩に毒入りの食べものを与えて殺したり…。

その記事のタイトルを見ただけでも鳥肌がたってしまいます。なかでも子猫を殺す様子を写真で撮影し、インターネットの掲示板で公開していた男のことをご記憶の方は多いのではないのでしょうか。

その猫はまだ子猫でした。殺される前ご飯をくれた犯人に対して子猫は嬉しそうにしていました。子猫はしっぽと足を切断され血が噴出しました。恐怖でおののくその小さな姿を見た犯人は面白がり、さらに行方はエスカレートしていきました。悲しいことに子猫の悲痛な叫び声は、密室で行なわれたその虐殺現場の外には届きませんでした。

殺す様子を写真にとり、得意げにインターネットの掲示板で公開し、あざ笑っていた男。その男は逮捕され、懲役6ヵ月の求刑となりましたが、そこまでの道のりは簡単なものではありませんでした。

私も「猫の殺害の様子がインターネットで公開されている」と聞いた当時、警察へ電話しました。電話はあちこち回され、かけ直しをさせられ、最後は警視庁ハイテク相談センターへ辿りつきました。

担当者に、この件について話すと、反応は次のようなものでした。

1. ネットで公開されているビデオ映像が本物か作りものか判断できない
2. 現在の法律ではネットでのこの行為を規制できない

結局、何もしてもらえませんでした。その後も数回電話しましたが、結局なしのつぶてです。

しかしこのニュースは日本の動物愛護家の間を駆け巡り、多くの人が警察へ意見を出しました。特に、殺害された猫に「こげんたちゃん」という名前をつけ、犯人逮捕のために3万人もの署名を集めた「Dear こげんた」というホームページは、大変有名になりました。逮捕のきっかけはHPを見た良識ある人々が集まり、IPアドレスを調査した結果、犯人をある程度特定したのだそうです。

「Dear こげんた」でも独自の調査によりバインダー1冊に及ぶ資料を警察へ提出したといえます。

この事件では、当初、この猫が飼い主のいないノラ猫であるという理由で、逮捕なしの書類送検処置で終わりました。

これに対し全国から抗議が殺到し、この犯人は逮捕され実刑となったのです。

この犯人が逮捕されたことは、同様の動物に対する犯罪の大きな抑止力になったに違いありません。

サイト「D e a r こげんた」のサイトから許可を得て、以下の詩を引用します。

『ママをさがして7こくらいよるをすごした。

ママはぼくがきらいになったのかな？

ママはどこへいっちゃったんだろう。

すてられたの？

おなかがすいてぺこぺこになった。

しかたがないから ゴミすてばにいたんだ、

そしたら

おにいちゃんがきて ぼくをいえにつれていった

あたらしいおうちだとおもって とっても うれしかった。

おいしいごはんもくれたのに、

なんで？

なんでぼくのしっぽをきったの？

なんでぼくのあしをきったの？

ぼく いいこにしてたよね

なんのために ぼく うまれたの？』

先日（平成 15 年 5 月 7 日）こげんたちゃんの 1 周期が行なわれました。生きている間は不幸なこげんたちゃんでしたが、こげんたちゃんのことを、心から祈ってくれる人たちがいることは、私たち残されたものの救いとなります。

以前は「動物ごとき」ですまされていた動物虐待の事件も、最近ではニュースになり、さらに、捜査の対象となるといった前進を遂げています。

最近、動物ではありませんが、人間の殺人予告をインターネットで行なった男が逮捕されました。動物に対しても同様な措置が今後とられるでしょう。

もし虐待された動物を見つけたら、まずその動物を保護し、そして、その子の写真を撮影してください。その後、獣医さんへ連れていき、治療を受けるとともに、警察、できれば最寄の派出所ではなく、県警（東京都の場合は警視庁）へ連絡し、動物愛護法違反で届けを出してください。届け出ることにより、それは事件となり、捜査の対象となります。

インターネットでの虐待については、印刷して残してください。前述したように東京都の場合は警視庁ハイテク相談センターへ届けます。

他県では県警の代表へ電話し、内容を伝えて担当部署へ回してもらってください。警察へ出向くかファックスなどで印刷した内容を伝え、動物愛護法違反で捜査を依頼してください。

同時にマスコミにも連絡し、ニュースにしてもらうようにしてください。

●警視庁ハイテク相談センターの連絡先は、Tel 03-3 4 3 1-8 1 0 です。さらに、町内会の掲示板や学校、公園などに動物虐待は犯罪である旨のポスターなどを貼らせてもらうよう働きかけましょう。町全体で虐待行為を監視する雰囲気できれば、抑止力になります。

人が弱いものをいじめたり、殺害して、その過程を楽しむことは尋常ではありません。家庭や教育の場で、相手を「支配する」ことを教えるのではなく、相手の立場に立ち、愛しむことの重要性を伝えましょう。

無知からくる虐待知らないことは＜罪悪＞

悪意を持った虐待とは別に＜意図しない虐待＞があるのをご存知でしょうか？

それに該当するのが劣悪飼育です。私は1年ほど前、ベトナムへ旅行に行ってきました。ベトナムでは紐でつながれて飼われている猫を何度か見ました。

また、路上で売られている犬はひどい状態でした。炎天下の中、犬を地面に置いて売っています。犬に「ふせ」をさせたような状態で、その体の形にそって竹で犬の体の形に編み込んだ籠を作って、犬をその中に入れているのです。

竹で編んだ籠なので、文字通り身動きひとつできず、犬は炎天下に置かれています。そのままでは死んでしまうかもしれないと私は思いました。しかし、売り手には悪気はありません。それが猫や犬にとってどんなに悲惨な状態なのか想像できないのです。ただ＜無知＞なのです。

ベトナムの犬猫事情を知ってびっくりしている私たちも、わが身を振り返ったとき、自分たちはきちんと動物愛護の基
本を認識していると胸をはっていえるでしょうか。

日本のペット事情も欧米から見たら、私が見たベトナムのように見えるのではないのでしょうか。実際、欧米人からは日本のペットにはなりたくない、という声が聞かれます。無知、想像力の欠如に悪気はなくても、動物に耐え難い苦痛を強いることがある、そのことを多くの人に知ってほしいのです。その動物が置かれている状況を自分に置き換えて、想像してみてください。

日本では犬を紐でつないだり、広い家の中の狭いサークルや檻の中にいれておくことを当たり前を考えていますが、庭や家にスペースがある場合には、その中で自由にさせてあげてほしいと私は思います。

もしご自身が1・5m程度の紐で日中つながれ、1日1時間の散歩の時間しか自由（しかもこれはリード付きの自由です）がなかったら、また、ご自身が犬の檻に1日入れられ、自分の意思ではその檻から1歩も出られないとしたら、その生活はどんなに不自由でしょうか。

ペットショップやブリーダーの動物たち その飼育や展示方法の問題点

数歩歩けばぶつかってしまうような檻に入れられている動物たち。そうした日本のペットショップの動物展示のあり方は、早急に改善されるべきものでしょう。

営業時間の長いお店では、ずっと電気をつけっぱなしで、隠れる場所もない状態に置かれた、動物の精神状態を想像してみてください。特に劣悪な状況を見かけたら店に改善を求めるか、行政にその状況を報告し、指導してもらいましょう。

一見、劣悪でなくても、日本では普通とみなされているペットショップの展示のあり方は、欧米から見ると動物虐待といわれています。どんなに自由になりたいくても、ショーケースから出たくても、自分ではそれが叶えられないとしたら、私だったら精神的におかしくなってしまいます。

“自由”は、ふだんは意識していませんが、失って初めてその素晴らしさがわかります。餌と水だけ与えられた生活とは、ただ死なないで、息をしているだけにすぎません。

飲みたいときに水が飲めて、歩きたいときに歩ける。外へ行けば雨が降っていたり、太陽がサンサンと降り注ぐ暑い日だったり、涼風が頬に気持ちのいい秋の日だったりする。風にのって流れてくる、いろいろなおいを味わって楽しむこともできます。

虫を追いかけたり、仲間と話したり追いかけてこしたり、お気に入りの場所にいて、そこで数時間ボーッと過ごしたり、ふだん何気なく行なっていること、それが自由です。自由がなければ生きている楽しみは何もありません。いかに冷暖房完備でも、また最高の食事と飲みものが与えられても、一生、六畳ぐらいの部屋に閉じ込められ、そこから自分の意志で出られなければ、たとえ数日でも大きな苦痛でしょう。

ましてその状態がいつまで続くかわからないとなれば、その苦しみは計り知れません。

猫や犬だけでなくすべてのペットにいえませんが、動物をある大きさの容器や檻に閉じ込め、その一生や1日をそこに拘束することは＜虐待＞といえないでしょうか。

生きるということは自由であるということです。ケージや檻から開放されて庭や家の中での自由へ…、日本の猫や犬をはじめとするペットの状況が変わっていくことを願います。また檻から出せないような猛獣や、日本に本来存在しない動物は飼育するべきではないと思います。

動物の展示などに関しては、「動物取扱業者に係る飼養施設の構造及び動物の管理の方法等に関する基準」という法律があります。

その中では「飼養施設の構造」として、「個々の動物が、自然な姿勢で立ち上がり、横たわり、羽ばたくなど日常的な動作を容易に行うための十分な広さと空間を有すること」と書かれています。

しかし、ペットショップで幅1メートルにも満たないようなケースに入れている動物に「日常的な動作を容易に行なうために十分な広さ」が与えられているとは思えません。

イギリスではペットショップはライセンス制です。また日本のように生きた動物をショーケースで見せて「あの可愛い子をください。」「はい、今ならお安いですよ、毎度ありがとうございます」というような日本式の販売することはないそうです。

コーディネーターという人がいて、飼いたい人がその動物と暮らすに適しているかをチェックします。たとえば、飼育経験の有無、こういった間取りの家に住んでいるか、などです。

日本でもイギリスのように法律が整備され、ペットショップの運営方法が改善されていくことが必要です。

テレビで報道された1頭の象の死 その背後に潜むもの

テレビでも報道されたのでご存知の人も多いと思いますが、動物園の元飼育員（ここではA氏とします）が、動物園を「象を虐待して死にいたらしめた」として告発しました。

2001年1月、象を虐待しているとして、元飼育員の隠し撮りしたビデオがお茶の間に流され、動物園が抱える問題を多くの人に考えてもらうきっかけになりました。動物の芸を見たり動物ショーを眺めるより、その動物が住む国へ行って、自然の姿を見ることがいちばんです。

檻に閉じ込められた動物を見るのは、私は、大変悲しいです。1999年12月、ある動物園で「ピコ」という22歳のアフリカ象が死にました。アフリカ象なのにタイ式の過酷な調教を受け、足を悪くした結果、死に至ったと22年間ピコを飼育した元飼育員A氏は動物園を告発したのです。

1998年10月、それまでずっとピコの飼育員だったA氏は異動になり、その後、動物園は3人のタイ人調教師を雇いました。ピコは、タイ人調教師により、手かぎで眉の間（象の急所だそうです）や鼻を突いたり、足や耳の付け根をくり返し突くことで調教されました。

またある日ピコは、前後両足にチェーンをつけられていました。通常日本で前後両足にチェーンが使われることはあまり例がないそうです。

1999年6月、ピコの足は痛々しく腫れて膿んでいました。ほかの象がおやつをもらうときも、ピコは1頭だけ離れたところにいたそうです。その当時、ピコは何を考えていたのでしょうか。おヘソが不自然な感じで出ていたそうです。

これは浮腫という症状でストレスからくるものだそうです。この頃、「ピコはただ息をしているだけの肉の塊」と別の飼育員が話していました。

1999年10月に入ると、「22年間でそんな痩せ方するのは初めて」というほど、あばら骨が浮き出てくるようになりました。

そして、ピコはある日、永遠に戻らない存在となりました。

A氏の言い分は、動物園側と真っ向から対立していました。動物園側は「ピコの死は調教のせいではない」としています。

A氏によれば、「動物園の経営がおもわしくなく、コストの削減として象の餌の品質などもかなり落としていた」、また「動物園を維持するため動物の商品化が激しくなり、象の飼育面積も減らしていた」と言います。

最近、欧米では「エンリッチメント」、つまり“動物によりよい環境を提供する”という考え方が浸透し始めています。

見世物として四六時中、身を隠す場所もないような従来のディスプレイ方法では動物にストレスがたまるので、隠れる場所をつくったり、少しでも広くしたり、遊ぶための道具を与えたり、食事をわざと所定の場所ではなくいろいろな場所に置いて、動物に探させたり、といった問題解消のための試みがなされています。

このエンリッチメントという考え方は日本にも入ってきており、いくつかの動物園がエンリッチメントに力を入れ始めています。少しでもこのエンリッチメントが日本中の動物園や水族館で広がっていくことを望みます。

ところで、日本では動物園のための法律、たとえば動物園法というものは存在しないことをご存知ですか。両者は「動物愛護法」の中で動物取扱業者となっています。また「展示動物の飼養と保管に関する基準」というものがありますが、展示動物一般の基準であり、動物園の規定には触れられていません。

再度イギリスの例になりますが、英国で動物園のための法律があり、動物園は免許制です。ある基準を満たしてないと判断された施設に対し、国は閉鎖命令を出すこともできます。さらに、去年動物園に関する基準も改正され、動物福祉が一層強化されました。

国を問わず、動物園の動物はペットショップで展示される動物とは、種類が大きく違います。動物園のための法律の制定は、劣悪な動物園からは敬遠されても、良心的な動物園からは望まれていることであると思います。

動物を展示していれば動物園というのではなく、ある一定の基準を満たした場所を動物園と認定するべきでしょう。人間の娯楽のためだけではなく動物福祉の観点を取り入れているか否か、社会的に認められる施設かなどを厳しく審査する

べきです。動物園業界と野生動物団体、動物愛護団体が意見を交換し、動物園のための法律のたたき台・制定へと連携できればと思います。

動物を虐待することは犯罪 動物愛護法改正を進めよう！

日本では「動物の愛護および管理に関する法律」という法律があり、愛護動物を虐待・殺傷すると法律で罰せられます。

虐待は 30 万以下の罰金、殺傷は 1 年以下の懲役または 1 0 0 万以下の罰金です。

動物虐待を見かけたら、警察へ届けましょう。

動物虐待は単なる“動物ごときの事件”ではなく、人間への犯罪へつながる前兆ともいわれています。海外の動物愛護団体の調査では、殺人を犯した者と動物虐待の関連が指摘されています。

殺人者の多くが、それ以前に動物を殺しており、海外の団体の調査では児童虐待があった 57 世帯の調査で、88%が動物を虐待しており、その 1 / 3 は虐待された子供がその怒りを動物にぶつけていたという報告があります。日本でも、凶悪な殺人犯が、人を殺害する前に何十頭もの猫を殺し、足を切断したり、目玉などをくりぬき、部屋にとっておいたという報告もあります。

人間の事件とも深く関わりがあると考えられる動物虐待は、ただ虐待者を裁けばいいというものではなく、どうしてそのような犯罪に至ったかということ进行调查し、その背後にあるものを解決しなくては根本的解決にはなりません。啓蒙、教育が大変重要です。

しかしやはり罰則の強化はひとつの大切な歯止めとなることは間違いありません。

日本の現行法でもまだまだ改善されるべき点が多くあります。私たち一人ひとりができることを実行し、声をあげ、少しでも動物がしあわせになれるよう、行動を起こしましょう。

コラム

冒頭でご紹介した「Dear こげんた」サイトの管理人m i m iさんが法律改正のため、署名を集めています。ぜひご協力をお願いします。

署名の内容は下記のとおりです。・虐待の定義を明確に規定、地方公共団体への動物愛護担当職員配置の義務づけ、動物取扱業の範囲を全ての動物を扱いものとし、届け出制から許可制へ、繁殖販売業者に関しては免許制に、動物を飼う人への講習の義務づけ、災害時における被災動物の救済措置を決めるなどなどです。

署名の送り先

〒103-8337 東京都中央区日本橋室町2-3-16 MBE106
宛名 ” Dear こげんた ”

Dear こげんた :

<http://www.tolahouse.com/sos/> および <http://www.dearkogenta.com/>

署名詳細 <http://www.dearkogenta.com/houkaisei/shomei-aigohou.htm>

問い合わせ <http://www.tolahouse.com/sos/a/> から 「問い合わせ メール」をクリック

こげんたちゃんの一周忌に……

<http://www.tolahouse.com/sos/a/>

平成15年5月7日。今日はこげんたの一周忌です。あの悪夢のような事件から1年が経ちました。夜7時半ごろ現地に集まることにしました。

いつもならどんたくの間に降るはずの雨がずれ込み、昨日から荒れ模様の天気となりました。今日も朝からときおり強い雨が降っています。あのときも雨が降っていました。あたかも、こげんたが「忘れないで」と言っているようでした。

中略

当初、犯人は見つからないとさえいわれていた事件でした。個人特定が難しい上、猫ごときで警察が本気になるわけがないと。しかし、多くの、本当に多くの人たちが君の運命を知って怒り、そして悲しみました。同胞が犯した罪を恥じ、止められなかったことを悔やみました。

そして、いても立ってもいられなくなった人たちが、せめて犯人に裁きを受けさせるため、立ち上がりました。そして、そこから道が開けたのです。あの事件から、動物を巡る環境が少しずつだけど、確実によいほうに変化しています。また、多くの動物たちがよい飼い主を得て、しあわせをつかみました。

この事件は、大きなきっかけとなりました。しかし、あいつにではなく優しい人に拾われていたら、今もしあわせに暮らしていることでしょう。こんなことで有名になるよりも、私は君に平凡な飼い猫でいて欲しかったよ。

こげんた、ありがとう。君の死は決して無駄にはしません。
安らかに眠ってください。

そう祈りつつ、私達は現場を後にしました。
雨がまた降り始めました。

おひさまはとっても

<http://www.tolahouse.com/sos/report/>

おひさまは とってもあたたかくてやさしいよ。 あめがふったら あまやどりするばしょだってあるよ。

おなががへったら、 ごみすてばにいけば たべられるよ。 かり だっておぼえたよ。

でもね、 ぼくにはなまえがない。 だっこしてくれるやさしいひざも、 あたまをなでてくれるあたたかい手もないんだ。

いつか出会えるかしら？

ぼくに なまえをつけてくれる人に…

ぼくを だっこしてくれるひとに…

あんしんして ねむれるばしょに…